三原府は、御調郡西のかたにありて、別に一城市をなせり、もと木梨庄に屬す、今の藩府廣島を去る十六里、和名抄に柞原（みはら）美波良と出これなり、柞をみと讀む、其義詳ならず、按に字書に除木曰柞とあれば、或は神祠のために、草木を芟除て、神の御原とせしよりいふならんか、國史に載る清御原の類考合すべし、木梨庄といふも、無木庄なるべし、又此地に八幡原の名もあれば芟除の義おもひあはさる、姓氏に御原三原あり、此地の名後世專ら三の字を用ふれど、古は御の字を用ひしも知るべからず、地の疆界古今のかはり考へがたし、今西野村の内に三原さめとよぶ地あり、西の界なりしにや、略○中今は只城市の地のみを三原と呼ぶ、其地廣廿一町餘、袤は東にて五町餘、西にて五十町餘あり、郡内、東野、西野、木原、山中の四村、豐田郡須波村、此五ヶ村を合せて三原城屬とす、通じて計れば廣二里餘、東は木原村より、西は西野村に至る、袤三里餘、南は須波村より、北は山中村に至る、略○中地の形勢、海を前にし山を後にし、東に米田山、鉢峯あり、略○中南は海にて、潮水城をめぐり、西にいり海あり、略○中此地海に面ひ山を負ひたれば、風氣和暄なり、海水常に穩にして、朝に風あれど、夕は必なぐ、俗にこれを三原夕和（ゆふなぎ）といへり、略○下

〔風雅和歌集九旅〕九月十三夜、いつく島へ參りけるに、備後のともといふ所にて、海邊月といふことをよめる、　藤原公重朝臣

あたら夜の月をひとりぞながめつる思はぬ磯に波枕して

〔太平記十六〕將軍自筑紫御上洛事附瑞夢事

新田左中將貞○義ノ勢已ニ備中備前播磨美作ニ充滿シテ、國々ノ城ヲ責ル由聞ヘケレバ、鞆ノ浦ヨリ左馬頭直義ヲ大將ニテ、二十萬騎ヲ差分テ、徒路ヲ上セラレ、將軍尊氏○足利ハ一族四十餘人、高家一黨五十餘人、上杉ノ一類三十餘人、外樣ノ大名百六十、兵船七千五百餘艘ヲ漕雙テ、海上ヲゾ上ラレケル〔同年五月○延元元〕五日備後ノ鞆ヲ立給ヒケル時、一ッノ不思議アリ、略○下